

中学3年生

「国際理解と平和Ⅰ」

体験を通して考えようー視野を広げ理解を深めるー

湯澤秀文・斉藤真子
仲田恵子・竹内史央
大林直美

【抄録】 中学3年では広島・大久野島への研究旅行を中心に、国際理解と平和についての総合学習を行なった。様々な企画も織り交ぜながら、年間を通してグループで学習を進め、年度末にはその成果を研究集録とWebページにまとめた。

【キーワード】 国際理解 平和 体験 歴史学習 グループ学習 広島 大久野島 Webページづくり 研究集録 キャリア形成 すいとん作り 留学生との交流 折り鶴 ポスター作り 短歌・俳句づくり ThinkQuest 総合人間科の発展

I. 学年テーマと目標

本校6カ年の総合人間科のカリキュラムにおいて、中学3年では「国際理解と平和Ⅰ」を学ぶことになっている。このテーマは、本校の中学3年生が広島へ研究旅行に行くことをふまえ、他学年とのバランスを考慮して設定されたものである。

国際理解や平和についての学習を進めるにあたり留意したことは、教科書や資料等の書物によって学ぶだけでなく、フィールドワークや交流会といった体験を通して考えるよう計画・指導してゆくことである。すなわち、頭と身体、そして心で感じ取ることが大切であると考えた。それにより、生徒たちの国際理解や平和に対する視野が少しでも広がり、理解も深まることを期待した。

このように、「体験を通じた視野の広がり」と理解の深まり」を学年の目標とし、サブテーマに掲げて一年間の活動に取り組んだ。

II. 総合人間科とキャリア形成

本校の総合人間科は、いわゆるテーマ追究型の総合学習である。その際、重要となるのは追求すべきテーマの「設定の仕方」と「追究の仕方」である。追究すべきテーマを何にするのか、そしてそのテーマをいかに追求して行くのか、そこに生徒各自の興味・関心、いわば個性が現われてくる。また、テーマの設定や追究方法がわからない生徒については、自らの興味・関心、ひいては自分自身と向き合えるように、テーマの設定や追究を援助する必要がある。こうした学習過程

を経ることにより、生徒たちは、毎年自分自身（の興味・関心）と向き合う機会をもつ。その中で、自分の将来と直接結びつくテーマと巡り合える生徒がいてくれれば素晴らしいことであるし、また、直接は結びつかなくても、自ら追究すべきテーマを発見し追究して行く態度が養えれば、それが本当の意味でのキャリア形成であり、キャリア形成の基礎づくりであると考え

る。今年度の中学3年での実践においては「国際理解と平和」という限られたテーマの中ではあるが、グループ学習でのテーマ設定に於いて各班の自主性を尊重することにより、生徒の興味・関心の掘り起こしに努めた。これにより、少しでも多くの生徒が自分自身の興味・関心への「気付き」をもち、そしてテーマを追求することによりさらに興味・関心を掘り下げて行くことを期待した。一方、グループのテーマが、当初は自らの興味・関心に沿わないものとなった生徒については、仲間とともに学習して行く中で、グループのテーマやグループ内での自分の役割に対して新たな気付きと視野の広がりが生まれ、キャリア形成の基礎となることを期待した。

III. 学習方法と指導体制

1. 歴史学習、広島学習など

- ①指導体制
学年全体で学習（担任団による指導）
- ②学習方法
「ビデオ」
「他学年の先生方の講義」

「留学生との交流会」

「すいとん作り」

「個人研究」(夏休み) など

ンクール

2. 研究旅行の事前学習、当日のフィールドワーク、旅行後のまとめ・発表等

①指導体制

グループ学習 (指導教官制)

②学習方法

調査：資料や書物、インターネット等を利用して調査

フィールドワーク：計画、交渉、班別活動、礼状

まとめ：研究集録、Webページ制作

情報発信：インターネットによる情報発信

作品：研究旅行でつくった俳句・短歌や写真のこ

3. 年間を通して

①メール、インターネット等の講習会を適宜行う：担任団による指導

②他の授業とのリンク (主に国語、社会、英語、学級活動等)

- ・国語…依頼状・礼状の書き方、「黒い雨」の鑑賞、広島・大久野島の短歌・俳句、
- ・社会…歴史学習、広島学習
- ・英語…英語で国際理解、平和ポスターづくり

Ⅳ. 学習の経過

次の表に示すような日程で、学習活動を展開していった。

月	日	曜	時限	授業内容	使用場所	備考
4	13	木	5・6	オリエンテーション1；ビデオ①「はだしのゲン」	図書館	生活の時間利用
	15	土	1	オリエンテーション2；目的・年間計画・アンケート等	図書館	授業参観
	20	木	2・6	オリエンテーション3；ビデオ②「はだしのゲン2」	図書館	生活の時間利用
	27	木	2	身近な人の戦争体験談1；準備(訪問先・質問事項)	各HR	各自FW
5	6	土	3・4+α	身近な人の戦争体験談2；報告会	各HR	
	11	木	5・6	ホームページ講習会1 ←各クラス1時間交替 (一方のクラスは教科授業)	視聴覚 +HR	生活の時間利用
	18	木	5	歴史学習1；丸山先生による歴史講義	図書館	生活の時間利用
	20	土	3・4	歴史学習2；すいとん作り	家庭科	
6	25	木	2+α	留学生者を囲む会1；準備(班分け・進め方・質問事項等)	各HR	
	1	木	5・6	留学生者を囲む会2；交流会	第一体育館	
	3	土	3	留学生者を囲む会3；準備(発表準備)	各HR	
	8	木	5・6	留学生者を囲む会4；報告会+ディスカッション	図書館	生活の時間利用
	15	木	5・6	広島学習1；田中先生による講義・体験談 ビデオ③「大久野島」	図書館	生活の時間利用
	17	土	3・4	広島学習2；ビデオ④「君はヒロシマを見たか」 ホームページ講習会2←各クラス1時間交替↑	社会科 +視聴覚	
7	22	木	2	ホームページ講習会3	視聴覚	
	1	土	3・4	研究旅行組織作り1；班決め・係決め	各HR+柔道場	
	3	月	6	研究旅行組織作り2；係別会合①	各HR+特別教室	
	6	木	2	班別研究テーマの設定1；ガイダンス・テーマ決め	各HR	
	11	火	5・6	特別授業「私が見たドイツとドイツ人」(教育学部寺田教授)	図書館	
	13	木	2	班別研究テーマの設定2；テーマ決め・行程表案作り	各HR+視聴覚+図書館	
9	15	土	3	班別研究テーマの設定3；行程表案作り	各HR	
	夏休み			「英語で国際理解」のレポート		
	2	土	3・4+α	夏休みの課題発表会	各HR	
	7	木	2	班別FW事前学習1 (訪問先検討)	各HR	
	14	木	2	研究旅行組織作り3；部屋割り・乗物座席決め	各HR	
9	16	土	3・4	班別FW事前学習2	各HR	
	28	木	2	班別FW事前学習3	各HR+図書館+視聴覚	
	30	土	3・4	班別FW事前学習4	各HR+視聴覚	

月	日	曜	時限	授業内容	使用場所	備考
10	5	木	2	研究旅行組織作り4；係別会合	各HR+図+視+書+物	
	7	土	3・4	班別FW事前学習5；質問事項	各HR+視聴覚	
	12	木	2	班別FW事前学習6；発表準備	各HR+図書館+視聴覚	
	19	木	2	班別FW事前学習7；発表リハ	各HR+図書館+視聴覚	
	21	土	3・4	班別FW事前学習8； 班別FW事前学習発表会+全体説明(実行委員会)	図書館	授業参観
11	26	木	2	直前準備1；係別会合等	各HR+特別教室	
	2	木	2	直前準備2；千羽鶴作成	各HR	
	4	土	3・4	直前準備3；班別会合+集合練習	各HR+特別教室+柔道場	
	7	火	2・3・4	事前指導(班別+全体+係別)	各HR+図書館+特別教室	
	8	水		広島・大久野島研究旅行		
	9	木				
	10	金				
	13	月	1	アンケート/係別会合	各HR+特別教室	
	16	木	2	研究旅行事後学習1；発表準備	各HR+図書館	
	18	土	3・4	研究旅行事後学習2；発表準備	各HR+図書館	
12	7	木	1・2・3	研究旅行事後学習3；研究発表会	図書館	
1	14	木	2・6	集録・ホームページ作成1；原稿入力分担・入力	各HR+コンピューター室	
	11	木		集録・ホームページ作成2；入力	各HR+コンピューター室	
2	19		2・6+α	集録・ホームページ作成3；入力完成	各HR+コンピューター室	
	25	木	2・6	集録・ホームページ作成4；レイアウト	各HR+コンピューター室	
	8	木	2・6	集録・ホームページ作成5；レイアウト	各HR+コンピューター室	
3	15	木	2・6	集録・ホームページ作成6；レイアウト	各HR+コンピューター室	
	17	土	3・4	集録・ホームページ作成7；レイアウト	各HR+コンピューター室	
	22	木	5・6	集録・ホームページ作成8；レイアウト完成		
3	8	木	2	Webページ発表・評価	各HR+コンピューター室	

V. 生徒の取り組みの様子(1)

～動機付けを中心に～

1. オリエンテーション(4月)

「平和と国際理解」という大きく抽象的なテーマを、生徒自身の問題として、あるいは、より身近なテーマとしていかにとらえさせて行くかが、オリエンテーション時の最大のポイントであった。これが機能しなければ、生徒の学習意欲や動機づけは希薄なもの、与えられたものとなり、とても一年間の学習を継続してゆくことは難しい。

そこで今年度利用したのが、ビデオアニメーション作品の「はだしのゲン」である。アニメーションという馴染みやすさと、主人公のゲンが生徒と同年代の人物であるという身近さに加え、広島や平和について感覚に訴えてくる手法に、動機づけの大きな期待をかけたのである。そして、今年度の総合人間科の第1回目として、目標や年間計画を生徒たちに詳しく説明する前に、とにかくこの作品を皆で観ることにした。

この作品では、戦争当時の社会情勢や被曝直後の悲

惨な状況、そしてその中からけなげに力強く生き抜いて行くゲンの姿など、様々な印象深い場面が展開された。そうした数々の場面に生徒たちは感動し、戦争に対する憤りを覚え、涙を見せるものもあった。この時の印象は年間を通して生徒たちの心の中に大きく位置し、その後の様々な活動の端々にこのビデオの話が聴かれるようになった。

この鑑賞会の二日後、オリエンテーションの第2回目として今年度の目標や年間計画の説明を行なった。前回の鑑賞会で学年テーマをより身近なものと感じていたためか、どの顔にも真剣な表情がうかがえ、充実したオリエンテーションが行なえた。

また、「はだしのゲン」には続編があり、これをオリエンテーションの第3回目として鑑賞した。そして再び多くの感動と、戦争に対する疑問をもちつつ、次の具体的な活動へと入って行くことができた。

2. 身近な人の戦争体験談(4月～5月)

11月のヒロシマ研究旅行の第一日目(宮島)の夜に、「平和リボンの会」の方々に来ていただいて、原爆体

験談（証言）を直接聞くことを予定していた。そのため事前に、祖父や祖母を始め身近な人からの戦争体験談を、連休を利用して聞こうということで、4月27日に質問する人・質問事項などの準備をして、5月6日からクラス別で報告会を持った。

身近な人達の戦争中の暮らしと状況、そして人々の気持ちはさまざまであった。報告会が進むにつれて、クラス中がお話を聞いた方から直接当時のお話を聞いているかのように思えてきて、その場の出来事がまざまざと現われ、シーンと声もなかった。

O君は祖母の家で「戦争中の状況」について聞いた。

<O君の祖母のお話の内容>

祖母は1941年で16歳東京に住んでいたが…。親族会議で宮崎の少年航空兵学校に通う弟に面会することになり熊本県水俣町（現在の水俣市）に住んでいるおばと一緒に行く。奇跡的に弟と出会うことが出来き、そのままおばの家に住み終戦まで帰れなかった。衣服は16～17年に政府から「衣料切符」が配布され、それのためと衣料が買えた。女性はもんぺを着ていた。履物は革靴ズック、げたの順になっていた。食料は込め一合をおかゆで食べ、一日2回だった。昭和19年頃に米がなくなるが、闇米を買ったりしていた。闇米は見つかると捕まるので運ぶ時は赤ん坊をおんぶしているのを装って運んだ。東京は食べのがなかったが地方はまだ少しはあった。祖母はさつまいもで下痢になってしまい紙がないのでとてもこまった。今でもさつまいもは好きではないらしい…。空襲警報が鳴ると電気を消し黒いカーテンを引き、あかりかもれないようにした。爆弾を会費するために家の屋根を取ることもあった。遊び事はしりとり。祖母は作事中、空襲にあい防空壕に友人と逃げ込んだ。祖母の家はキリスト教でその時生まれて初めて心底神様に祈った。ただただ震えて背中を突き抜ける恐怖だったという。空襲が終わり外へ出てみるとさっきまで話している人がたくさん死んでいた。それをみた時は、なんともいえない思いだった。仕事場の防空壕（逃げ道のトンネル）を掘るのは、今で言う韓国人・北朝鮮人の人々だった。

祖母はその人たちと親しくなりむこうの国の歌を教えてもらい一緒に歌っていたそれが唯一の楽しみだった。しかし、その工事現場が空襲にあい工事現場の人々は生き埋めになってしまった。

そして昭和二十年8月9日長崎の原爆を対岸の水俣から強烈な閃光で見た。もちろん原爆とは知らずに…。

<O君の感想>

3時間以上に及ぶ話を聞き1～2分にまとめるのは

正直難しかった。16、17といえば高校生。僕達とそんなに変わらない年頃なのに、想像以上の体験をした。今の自分では考えられないことを祖母は経験していた。祖母の話聞いて戦争の残酷さ、無意味さを改めて痛感した。こんなことをわずか半世紀前まで、同じ日本人がやっていたことが僕は信じられません。この悲劇が二度と起きないように、僕達若者が真剣に考えなければならぬと思いました。

また、中国人のTさんは中国にいる祖母と手紙でやりとりをしてこの報告「戦争を知る」をまとめた。報告のはじめに、Tさんはその理由について「なぜこのような面倒なことをしたのか」というとやはり日本人の戦争体験という、どうしても日本だけに片寄ってしまいがちなので、平和と国際理解の一環として中国人の戦争体験も紹介して、少しでも戦争の悲惨さと愚かさ、また人間一人ひとりの命の重みとすばらしさを学び取りたいと思ったからです。今から手紙に書かれていたものより、いくつかの話を紹介します」と話し始めた。

<Tさんの祖母のお話の内容>

日本敗戦の1945年春、この時祖母は17才でした。日本軍が引き上げた後の中国東北部に後から参戦したソ連軍が上陸したそうです。しかし滞在中に軍の副官が近くに住んでいた中国人女性に暴行を働くという事件がおきました。これでは日本軍と同じで示しがつかないと、軍の責任者自ら泣く泣く馬とともに彼を銃殺、その後副官と彼の馬を近くの山で丁重に埋葬。その墓は今もそのまま残っているそうです。

また朝鮮を植民地として統治している影響で中国にいる朝鮮人は日本式の姓を名乗る（創氏改名）や神社への参拝が強制され、日本人に同化させようとする皇民化教育が進められたそうです。

他に731部隊（これは細菌兵器の研究などを専門とする集団）の実験用施設（すべて人間で実験されていた、実験材料の人間はほとんど中国軍の捕虜や現地の中国人等で、マルタと呼ばれた）を日本軍がひきあげる直前に証拠隠滅のため中にある実験用の人間もろともに爆破したという話（その中に私の曾祖父もまじっていた）等が書かれていました。

<Tさんの感想>

何だか日本人の悪事しか祖母は書いていないが、これは日本国民に知らされていないだけで、すべて事実なのです。もう過ぎてしまったことなのでいまさらどうにもなりません。こういう事実があったということだけでもみなさんに知っておいでいただきたいと思いま

す。二度とあやまちを繰り返さないためにも…

みんながクラスで報告しあった「身近な人の戦争体験談」の地理的な範囲は、中国・満州・インドネシア・タイ・ハワイに広がり、いろいろなお話を聞きあうことが出来た（世界地図を用意して出てきた地名を確認することもやればよかったという反省あり）。当初の予定より時間がかかったが、戦争中に使われていた言葉や出来事について質疑応答をしたりして、戦争中の暮らしや状況について、知らない事実をみんなが発見することになった。

さて、みんなの報告を聞き終えての感想で、Tさんは次のように述べている。

<報告会でのみんなの報告を聞いてのTさんの感想>

私たちの年代にとって、戦争と言われてもピンときません。ああ—そんなことがあったのだなというくらいの感覚で、過去のこととしてとらえていたことが、今回のインタビューで少しは身近にかんじられたのではないのでしょうか。皆真面目に積極的に取り組んでいたと思います。発表の仕方も3年目にもなると手慣れたもので質問事項と回答をそのまま報告していただくの単調なものではなく、ちゃんと自分の考えなどをまじえながら、文章の形で展開していくところなどは、今までのインタビューが、無駄ではないことを示していると思いました。

ただ、やはり皆、背景が酷似しているのも、同じような内容になっているのが残念でした。

今の日本の子どもたちは、他の国と比べて戦争に対する知識・認識が少ないので、このような機会が増えればいいなと思いました。（できれば日本国内だけでなく、外国の視点から見てみるのも新鮮でいいと思います）。

そしてまた、報告会の後で親友のBさんから「Tさんのお話の創氏改名・皇民化教育・731部隊って何のことなの。みんなは知っているの。私が知らないだけなの」と質問されたTさんは、祖母から聞いた詳しい話を廊下で始めた。

その時、731部隊についてよく知っていると言ったT君は、父方の祖母と祖父から聞いた戦争体験談の話の報告の感想で「祖父の乗っていた馬が敵弾に当たって死んでくれたおかげで祖父は生き残りました。馬が祖父の身代わりになって死にました。祖父は九死に一生を得たわけです。この話を聞いている時、僕は不思議な気持ちになりました。祖父が死んでいれば僕は存在しません。馬が死んで祖父が生き残りました。そして今僕がいます。」と締めくくった。

日ごろ離れて暮らしている祖父や祖母から直接聞いた話は、中学3年生であるということ、当時の祖父や祖母と同じ年齢ぐらいになるということもあり、家族のルーツに思いをいたすことにもなった。

3. すいとん作り（5月）

5月18日の丸山先生の歴史講義のテーマは「なぜ日本は戦争をやめたのか、その真相は？」であった。

その講義の最後に丸山先生は「土曜日の「すいとん」はなぜそのような食生活になったのか考えながら作って食べて欲しい」といわれた。

また、事前に「すいとん作り」のことを保護者会で紹介し協力を呼びかけると、Y君のお母さんから東北の郷土料理の「ひつつみ」を届けていただいた。総人の実行委員と一緒に事前に「すいとん作り」のリハーサルをしたときにはY君のお母さんのレシピを参考にした。Y君の家では野菜を実たくさんにいたおいしい「ひつつみ」をよく作るとのことだった。実行委員は初めてすいとんを作るので、小麦粉と水の分量や大きさに試行錯誤した。また「ひつつみ」には水の代わりにお酒が練りこんであることや野菜がいろいろ入っていることも分かった。

さて、当日の「芋づる」の代わりにダイコンが入った「すいとん」作りは、「小麦粉に水を入れてスプーンなどでかき混ぜる」と「フツフツと煮立っている状態の鍋に指先でうすく伸ばしながらポトリポトリと落としていく」ことが特に男子には好評であった。

試食後の感想は「材料はとても質素。作り方がシンプルなのに意外においしかった」「こんな食事ではからだもたない。こんなものばかりでどうしてだれも文句を言わなかったのか」「何でも手に入るし食べ物に不自由しない何でも捨てる私達の生活を反省」などであった。現代の生活と比較して、戦争中の食べ物の一端を見直すことが出来、実行委員をはじめ貴重な体験ができた。



<すいとんづくりの様子>

4. 留学生を囲む会（5月～6月）

国際交流、国際理解を目的として、「留学生を囲む会」を企画した。実施日は6月1日（木）5、6限で、名古屋大学の留学生を招いて行なった。学習過程は以下のとおりである。

(1) 目的：留学生との交流を通し、コミュニケーションの大切さや楽しさを実感するとともに、異文化に触れる契機とする。また、外国人の戦争や平和に対する考え方にも触れ、国際理解を深める場とする。

(2) 事前学習活動（5月25日総合人間科1時間、5月30日英語1時間）

①グループ分け：各クラス5つのグループを編成し、合計10グループとする。留学生の数に変更があれば当日までに調整する。研究旅行の班で行なうこととなった。

②交流会の役割分担：司会進行、記録の係を決めた。質問は全員で行なうこととした。

③親睦のためのゲームを決める：交流会で留学生とゲームで文化交流することにし、生徒は自分たちでどんなゲームをするか決めた。

④報告会の役割分担：後日行なう報告会の発表者、資料作成者、発表アシスタントなどを決めた。

⑤質問事項を考え、英訳し、班で質問の順番を考える：生徒は質問事項を適当な順番にならべ質問者を決めた。英訳は英語の特別授業で完成した。

⑥外国人にインタビューする際の心得、交流会の基本英語表現の学習：英語の特別授業を行なって交流会で使える英語表現を覚え、インタビューのマナーについて学習した。例えば、プライベートなことは尋ねないことや、相手の答えが聞き取れない場合はどのように言うか、交流会の始めと終わりの挨拶は英語でどのように言うかなどを学習した。

(3) 交流会当日 6月1日（木）5、6限

当日は名古屋大学の留学生8名の参加を得た。その内訳は中国人2名、韓国人2名、フランス人1名、アメリカ人1名、台湾系アメリカ人1名、韓国系アメリカ人1名、であった。交流会のプログラムは以下のとおりであった。生徒はそれぞれが各自で記入する「交流会報告用紙」に留学生の話のメモや班のメンバーの質問とそれに対する応答などを記入した。

①始めの挨拶

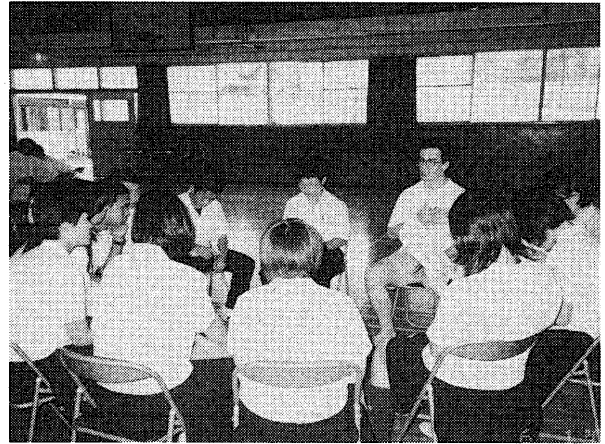
②歓迎の言葉

③自己紹介

④ゲーム

⑤インタビュー

⑥フリートーク



<留学生を囲んで>

(4) 事後学習活動 6月1日のST、6月3日の3、4限、6月8日（木）5、6限

①感想とまとめ：交流会終了直後、生徒は「交流会報告用紙」の最後に交流会の感想を記入して提出した。

②報告会準備：6月3日の3、4限に、各班は留学生とのインタビューとフリートークで得た情報をまとめ、文字や絵の入ったパネルを作ったりして交流会で報告を行なうための準備をした。

③報告会：6月8日（木）5、6限に2クラス合同で留学生8名のそれぞれについて交流会の報告を行なった。司会進行は総合人間科系の生徒が担当した。生徒は交流会報告会評価用紙を持ち、各班の報告を聞いてメモをとり、発表に対する感想と評価A～Eを用紙に記入した。

各グループでは、留学生の英語、日本語、韓国語で会話が進められた。留学生の中には日本語が話せる学生がいたので、生徒たちには分かりやすかった。またあるグループでは、本校生徒の中に朝鮮民族系中国人のTさんがいて、韓国人留学生と韓国語で会話することができた。この班では他の生徒の質問がうまく留学生に伝わらないときにはTさんが通訳をしてコミュニケーションを深めることができた。教育実習生もグループの交流会に参加した。

生徒たちは留学生との交流を通して、留学生の出身国について、母国の生活習慣や文化について、留学生の趣味特技や好きな音楽や日本の食べ物について、学校生活の相違、日本の印象などについてインタビュー形式で対談した。

生徒の感想としては、「とてもいい人だった」「英語でコミュニケーションをとるのが難しかった」「留学生の英語の答えがよくわからないところがあった」「Tさんが韓国語で通訳してくれてすごかった」「もっと英語で質問をしたかった」「話を聞いて驚いたことがあった」「日本語で話してくれ

て分かりやすかった」などがあった。生徒のそれぞれがコミュニケーションのための語学学習の重要性を感じたようであった。

5. 英語で国際理解 (7月～9月)

夏休みの課題学習は、総合人間科と英語科のクロスカリキュラムの課題として「英語で国際理解」を提示した。これは語学学習、国際理解、国際交流、自国文化の認識を深めることを目的とした自由研究で、生徒個人だけでなく家庭で取り組むことのできる課題として学年通信で家族の協力を呼びかけた。指導過程は以下のとおりである。

(1) テーマを決める

発表者や観客が国際的な知識や理解を深めることのできる内容で自由にテーマを選ぶ。平和、歴史、教育、文学、科学、食物、被服、建築、技術など、さまざまな分野から選ぶ。困ったときは家族や友達や先生に相談する。生徒の興味関心のある分野で調査・研究を進める。写真を撮ったり、人に話を聞いたりするときには、日ごろのフィールドワークの体験を生かして取材する。内容例：

- 日本文化・生活習慣を英語で紹介する
- 外国文化・生活習慣を紹介する
- 英語の作品 (物語、映画、歌など) を鑑賞してその内容や背景を紹介する
- 英語以外の言語の作品 (物語、映画、歌など) を鑑賞してその内容や背景を紹介する
- 旅行した場所 (日本の町、海外の町) を紹介する
- 人物や団体の活動について紹介する

(2) レポート作成

9月2日 (土) 総合人間科の授業で夏休み課題の発表会予定し、日本語のレポートと写真、図表、資料などを準備する。レポートの長さは自由。引用するときには必ず出典を明らかにする。発表は日本語で3分以内にまとめる。

(3) レポート提出

9月4日 (月) 英語の授業でレポートを提出。9月2日に使った日本語のレポートに、表紙をつけて提出。表紙には、英文の要旨 (自由研究の説明を簡単に英語で書いたもの) を書いて提出する。提出の際に仲田とカガミ (ALT) の2人で英文をチェックする。

評価は、英語の要旨と日本語のレポートを提出した段階で、英語の課題提出点を平常点として加えた。

生徒は各自の興味関心のあるテーマを選んで取り組み、自由な形式で研究をまとめていたので3分以内で発表することはなかなか難しかった。結局9月2日 (土) 総合人間科の授業で全員の発表を終わる

ことができなかったため、残りの発表者は9月4日 (月) 英語の授業時に発表した。この日はALTのゲルダ・カガミさんとのティームティーチングの日であったが、学年の他の先生方も参加して発表会の続きを行なった。

生徒の発表は、「箸」をテーマに日本の美しい箸をいくつか持参して日本文化紹介をしたり、「味噌汁の作り方」を紙芝居形式にして作り方手順を英語と日本語の2ヶ国語で紹介したり、英語の絵本を1冊日本語に訳して物語を紹介したり、ドイツの学校についての本を読んでその内容を紹介したりとバラエティー豊かな楽しいものであった。夏休みに入る前の7月に保護者面談を行なった際に生徒本人や家族に尋ねたところ、「英語で国際理解」の課題について半数以上がいいアイデアを持っており、家庭で取り組む準備を進めている家族がかなりあり、積極的に取り組む姿勢が見られた。実際に目を見張るような優秀な課題研究がいくつかあり感心した。

VI. 生徒の取り組みの様子 (2)

～広島・大久野島研究旅行を中心に～

1. 研究旅行およびグループ別研究の概要

① 行程

11月8日 (水)

広島市内 班別フィールドワーク

証言者の方々の戦争 (原爆) 体験談 (宮島)

ひろしま平和リボンの会 (5人)

11月9日 (木)

宮島 散策

平和公園

資料館副館長内藤氏の講話「平和アピール活動」

見学 碑めぐり

平和セレモニー (英文と日本文の平和宣言文)

献鶴「虹」と「PEACEの文字」による「千羽鶴」

毒ガス資料館見学 (大久野島)

海蛍 キャンプファイアー・肝試し

11月10日 (金)

自由レク 貯蔵庫見学 (自転車)

毒ガス資料館元館長講話

② 指導教官制によるグループ別フィールドワークの指導

A組

1班 仲田 (英語)

2班 〃

3班 湯沢 (数学)

4班 〃

5班 斉藤 (国語)

B組

- 1班 竹内 (理科)
 2班 〃
 3班 大林 (体育)
 4班 〃
 5班 斉藤 (国語)
- ③グループ別研究テーマとねらい
- A組1班 平和ってなんだろう
 (へいわについて知る)
- 2班 アジアと広島
 (日本の侵略の歴史と韓国・朝鮮人の被爆の実態について学ぶ)
- 3班 黒い雨
 (黒い雨の降った理由と人体に及ぼす影響)
- 4班 こども～被爆した子供達～
 (当時原爆を受けた子どもたちの今を知る体内被曝を中心に)
- 5班 原爆が美術に与えた影響
 (絵から原爆について知る)
- B組1班 みんなで知ろう広島の原爆
 (広島の原爆をいろいろな方向から考える)
- 2班 広島の子どもたち
 (広島の子どもたちの戦争に対する思いや戦争のことについてどう教えられ学んでいるか)
- 3班 在日在韓国・朝鮮被爆者の差別と歴史
 (在日韓国・朝鮮人被爆者の被害と差別を知る)
- 4班 Atomic Bomb and Hiroshima
 (原爆と放射線が与えた影響について知る)
- 5班 ヒロシマ ～Steps Toward Peace
 (平和へのあゆみを知る)

2. グループ別研究 (7月～3月)

(1) 仲田グループ

①A組1班の研究内容と取り組み

A組1班は、私たちが日常当然のこととして享受している「平和」とは何かを見つめなおそうと考えた。広島では平和を推進する様々な活動が行なわれていると聞いているが、「平和」とは何かと問われたとき自分たちが答に困るということを知覚して、1班は「平和ってなんだろう」をテーマに選んだ。フィールドワーク先は広島平和教育研究所であった。

研究の概要は次のとおりである。

事前学習では「平和とは何か」を考え各自の意見をまとめ、平和に関連する活動をしている団体やボランティアグループの調査、フィールドワーク先をインターネットで検索、原爆や広島市内の平和の碑について図書資料やインターネットで調査することなどの活動をした。この段階で生徒はそれぞれが「平和」の定義を考え、広島の町について下調べをして、実際のフィールドワークで得る情報と比較する準備をした。

広島フィールドワークでは広島平和研究所の事務局長に会い、研究所の活動、研究方針、平和教育の内容、韓国朝鮮の人々が原爆投下時に広島中心部にいた理由、海外の子供たちと日本の子供たちの平和についての意識の違いなどについて質問し回答を得た。

1班の生徒たちは事務局長から、当時は多くの韓国朝鮮人の人々が日本に無理に連れてこられて働かされていて、約3万人の韓国朝鮮人が原爆の犠牲になったが韓国人慰霊碑が平和公園内に移されたのは2年前だったという話を聞いた。

フィールドワークを終えて、生徒たちは「平和」がただ単に戦争のない状態をいうだけでなく、貧富の差が無く、だれもが食べ物を得ることが出来、いじめがなく、暴力や差別や貧困のない状態をいう意味の深い言葉であると知った。

広島平和研究所の事務局長の言葉は生徒たちにとって大変印象的であった。「戦争はまだ終わっていない。それは世界大戦により起こった問題で今もなお裁判が続いているので。」この言葉に生徒たちは加害者としての日本の立場を認めなくてはいけないと意識を新たにした。

また、事務局長は「貧富の差、人種差別、暴力、これらをなくするのは不可能かもしれない。しかし、そこであきらめてしまったら終わりだ。少しでもそれに近づけるように頑張って、違うものは違う、おかしいものはおかしいと声を出していこうではないか」と生徒たちに語りかけた。生徒たちはこの言葉に感動して「真の平和を実現するために私たち一人一人が身近なことから努力していかなければならない」と決意した。これほど素晴らしい話をしてくださった事務局長の石岡修氏に心より感謝申し上げた。

②A組2班の研究内容と取り組み

A組2班は英語の授業で韓国の中学生とEメールをしていて、韓国や東南アジアの国々と日本との関係に興味を持ち始めた。調べていくうちに原爆の被害を受けたアジアの人々の数が多数であったことを知り、「アジアと広島ー日本の侵略の歴史と韓国、朝

鮮人の被爆の実態について学ぶ」をテーマに研究を進めることにした。

事前学習ではまず、図書資料やインターネットで原子爆弾について調査し、原子爆弾の仕組み、破壊力、広島と長崎に落下された原子爆弾について調べ学習をした。次に日本の侵略の歴史を調べ、豊臣秀吉によるアジア支配の野望のための朝鮮侵略と強制連行、その後の不平等な江華条約、東学党の乱、日清戦争、それから皇民化教育、朝鮮教育令などの植民地政策について学んだ。

フィールドワークの訪問先は、日朝被爆者の連帯を進める会(ヒロシマを語る会) 代表の原廣司氏と、在日朝鮮人被爆者連絡協議会会長の李実根氏であった。

まず、原廣司氏の案内で平和公園内の碑めぐりをした。原爆ドーム、相生橋、平和の時計塔、平和の鐘、動員学徒慰霊碑、原爆犠牲者ヒロシマの碑、原爆供養塔、爆心地、韓国人原爆犠牲者慰霊碑、平和の灯、平和の池、原爆の子の像、原爆死没者慰霊碑、被爆したアオギリ、原爆犠牲者国民学校教師と子どもの像、嵐の中の母子像などを数時間かけてめぐった。

日朝被爆者の連帯を進める会(ヒロシマを語る会)は1984年に結成されてから16年の間原廣司氏を中心とした17人のメンバーで小学校、中学校、高校の約45万人の生徒に被爆の体験を語ってこられた。しかし2000年度を最後にメンバーの高齢化を理由に解散すると言われた。後日、原廣司氏から組織が変わるけれど、語る会の活動は続けていかれるという文書が届いた。

次に在日朝鮮人被爆者連絡協議会会長の李実根氏に会い、被爆時の体験、日本の侵略戦争、戦後保障問題について教えていただいた。李氏が原爆投下の数時間後に広島市内を歩いて通過して被爆し第2号被爆者となったこと、中学へ入ったが民族差別がひどかったため中退せざるを得なかったことを聞いた。

また、当時広島は軍都と呼ばれ、明治維新後、日清、日露、満州事変、中日アジア太平洋戦争のなど侵略戦争はすべて日本が仕掛けた戦争であり、すべて広島の軍港から出発したのだということを知った。また李氏は戦後保障の問題についてなぜ日本は「補償」という言葉を使って謝罪しないのかその理由を教えてくださいました。

生徒たちは、日本は広島に原爆を投下され被害を被ったという被害の事実とともに、日本がアジアの多くの地域を侵略し他国の人々を強制連行し過酷な労働を強いていたことや、多くの外国人も被爆したという加害の事実を学んだ。

A組2班の取り組みは特に積極的で生徒たちは碑めぐりの様子や原氏、李氏が語る様子をデジタルビデオカメラで撮影し、後日これをWebで公開することとなった。後に述べる、シンククエスト教材Webページコンテストに応募したのである。生徒たちの研究活動にご協力くださった両氏に心より感謝申し上げる次第である。

(2) 湯澤グループ

① 研究内容

A組3班は、国語の授業で学んだ井伏鱒二の「黒い雨」をヒントに、黒い雨そのものの仕組みや人体に及ぼす影響について調べようということになり、研究テーマを「黒い雨～黒い雨の降った理由と人体に及ぼす影響～」とした。

フィールドワーク先は放射線影響研究所と広島県「黒い雨・自宅介護」原爆被害者の会連絡協議会であった。

研究の概要は次のとおりである。

事前学習では、

- *フィールドワーク先の概要
- *黒い雨の仕組み
- *放射能の人体への影響について調べ、
- *黒い雨には爆心地よりも強い放射能が含まれている場合もあった
- *人によっては黒い雨の影響は数十年後に現われる場合もあった
- などがわかった。

広島フィールドワークでは

- *被曝当時の具体的状況
- *A B C Cの活動の様子
- *A B C Cと原爆被害者の会連絡協議会との立場の違い
- などがわかった。

A組4班は、胎内被曝をしたこどもたちを中心に、被曝の様子、胎内被爆者の家族やそれを支える団体について調べようということになり、研究テーマを「こども～被曝した子どもたち～」とした。

フィールドワーク先は放射線影響研究所と「きのこ会」であった。

研究の概要は次のとおりである。事前学習では

- *フィールドワーク先の概要
- *胎内被曝の実例
- *原爆の人体への影響
- *折り鶴の碑について調べた。

広島フィールドワークでは

*被曝線量の測定法

*被曝時期の違いによる胎内被曝の症状の差異

*胎内被曝者やその家族、支援団体の実情などがわかった。

②取り組みの様子

両班とも、事前学習では図書文献以外に、インターネットも利用して調査を行なった。事前学習の開始当初は、意欲的に調べる生徒と、与えられたことを受動的に調べるだけの生徒との差が大きかった。しかし、訪問先との交渉をして行く中で、多くの事前学習の資料を郵送していただいたり、励ましのお手紙を何度も頂き、生徒たちは「訪問先の方は自分たちの学習にとっても期待していて、こんなに一生懸命支えてくれている」と感じるようになった。そして、全体として中身の濃い準備ができたように思う。

また、事前の手紙のやりとりの中で、広島市立鞆町中学校に「折り鶴の碑」が出来たことを知った。その碑は、訪問先の大牟田さんのご尽力で出来たということであった。そこでA組4班では、学年としてつくりあげていた「平和宣言文」をアレンジし、鞆町中学校での平和集会に「折り鶴の碑へのメッセージ」として送らせて頂いた。これに対し鞆町中学校生徒会よりお礼の手紙が届き、この班も広島で「折り鶴の碑」を訪ねて来るなど、事前学習を通して思わぬ深い交流ができた。

広島でのフィールドワークでは両班とも自主的に行動し、事前学習で生まれた疑問点を解決していった。訪問先の方々も大変一生懸命説明して下さいました。このため生徒たちは研究旅行全体を通して多くのことを体で学ぶことができ、旅行後どの生徒も充実感を口にしていた。そしてこの体験は事後学習としての研究集録づくりやWebページづくりの強い動機づけとなって行った。

(3) 竹内グループ

B組1班の研究内容と取り組み

この班は「みんなで知ろう広島の原爆」をテーマに多面的に原爆被害について調べることを目標にした。

フィールドワーク先を決め始めた当初は真剣味に欠ける者もいてリーダー役は苦勞していたが、とにかく饒津神社と世界平和記念聖堂の2か所を訪問することになった。

この2か所は関連性を考えて決めた訳ではないのだが、訪問してみると、広島県宗教連盟の活動を通して密接に関係していることがわかり、意外な成果が出た。被爆地広島では世界平和のために、宗教の

壁を越えて各宗教団体が協力する体制ができている。ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世の来日の際にもカトリック教会だけでなく、神道や仏教の関係者も式典に参加したそうである。

建造物の被害や人的被害について知ることができたのも貴重な体験であったが、宗教連盟の活動を知り、宗教に関わる人たちの平和に対する熱い思いを聞くことができたのが一番大きな成果であったと思う。

B組2班の研究内容と取り組み

この班は「広島の子どもたち」をテーマに原爆投下当時と現在の両時点自分たちと同世代の子どもたちについて調べることを目標にした。

当初の計画では小・中学校を訪問し、児童・生徒に対してアンケートやインタビューをする予定であった。しかし、フィールドワークの当日が広島市の小・中学校すべてが午前で授業が終わってしまう日にあたってしまい、これは実現できなかった。このため、原爆投下当時年少であった人の被爆体験を聞くことにフィールドワークの目標を絞り、平和記念資料館の紹介で高橋昭博先生のお話を伺うことになった。

そのお話は、とても落ち着いたやさしい口調であるにもかかわらず、被害のすさまじさを強く印象付けるものだった。普段はふざけているばかりの生徒も、真剣に話を聞き、その重さを感じ取っていた。

(4) 大林グループ

①研究内容

B組3班は、原爆の被害者には日本人だけではなく外国人も多くいることに目を向けた。そして、その中でも被害者数をもっとも多い朝鮮人原爆被害者に焦点を当てて調べることにした。こうした被爆者についてはあまり知られていないうえに、外国人というだけで様々な差別を受けてきた。そこで研究テーマを「在日在韓韓国・朝鮮被爆者の差別と歴史」とした。

フィールドワークでは、韓国人原爆被害者特別委員会の代表者である姜文熙(カン ムンヒ)さんと、韓国の原爆被害者を救援する市民の会の代表者である豊永恵三郎さんにお話を伺うことになった。

研究の概要は次のとおりである。

事前学習では、フィールドワーク先の概要、日本・韓国・朝鮮の現代史、差別の歴史について調べた。

フィールドワークでは、お二人にお話を伺い、韓国人原爆被害者慰霊碑が平和公園に入った背景、戦後の医療制度、日本が行ってきた不十分な戦後の補

償、などを学ぶことができた。

B組4班は、原爆の被害と当時の生活から復興までの様子を調べることにした。そのためフィールドワークでは、原爆養護ホーム舟入むつみ園を訪問して被爆体験をお聞きし、中国新聞社では復興の様子を学ぶことになった。

研究の概要は次のとおりである。

事前学習では、フィールドワーク先の概要、原爆投下直後の様子、原爆孤児・孤老、について調べた。そして、あらためてフィールドワーク先の皆さんからお話を伺うことで、被爆場所の違いによる被害の差異や、今でも続く被爆後の後遺症について知ることができた。

②取り組みの様子

3班は、難しいテーマであったが生徒がひとつにまとまり、意欲的に学ぶことができたと思う。その理由の一つは、訪問先の方に事前に学習すべき点をお伺いしておいたことである。フィールドワークでの理解を助けるために、効果的な事前学習ができた。もう一つの理由は、現代史から調べ始めたため事前学習の量が莫大なものとなったが、生徒が分担して学習を行い、それを教え合うことによって、「もっと学びたい」という気持ちがひとつになったためと考えられる。また、フィールドワーク当日には一句を書き記した色紙をいただき、研究旅行後、国語科の先生を交え、その句の意味を皆で考え合った。これにより、平和に対する認識をさらに深めることができた。

4班は、取り組みやすいテーマであったため、多くの文献や資料に恵まれて事前学習を行なうことができた。しかし、フィールドワーク先で実際に被爆者の方々からお話を聞くことにより、本やインターネットで調べた時には見えなかった被爆者の方々の心情に触れることができた。そして、このつらく悲惨な被爆体験のお話をふまえ、平和の大切さを自分たちが語り継いでいくことを誓っていたようである。訪問先では、歌のプレゼントもでき、その後もお手紙のやり取りなどの交流が生まれた。

(5) 斉藤グループ

担任・副担任による指導教官制で班の担当を決めたので私はA組とB組にまたがって担当することになった。両クラスを行ったり来たりで少しやりにくかったところもあった。

さてA組5班は「美術」に関心を持つ女子生徒の意見でテーマが決まった。一方B組5班は「平和へのあゆみ 過去・現在・未来」というテーマを男子が中心になって決めた。初めから話し合いがスムー

スにいったA組5班とは対照的に、B組5班は時間がかかった。しかし、話し合いを重ねるうちにだんだんまとまりがでてきた。昨年の個人研究とは違って何を誰がやるのかの分担決めに納得のいくまで話し合いをするので、最初は何をするにも時間がかかったが、事前研究発表会からフィールドワークへと経るうちに、共同研究であることのよさがでてきた。それはホームページ作りや研究集録のまとめなどでも発揮された。友達を「見直したわ」という声が聞かれた。広島でのフィールドワークから班の研究もより個性的になっていった。特にA組5班の「証言」をもとにした漫画作りは楽しんで描いていた。校内ホームページでの公開でもみんなの印象に強く残ったようである。

①研究内容と取り組みの様子

A組5班「原爆が美術に与えた影響」

○丸木位伊里さん・俊さんの原爆絵による衝撃

<本物を見たい><埼玉の丸木美術館>

○ゲルニカ(ピカソ)を知る<教科書に紹介>

○広島平和美術協会 白井史朗さんから送られた絵

本「ミヨちゃんの笛」と英訳のまちがい探し

<みんなで分担して和訳>

○市民が描いた原爆の絵<資料館地下に展示>

○世界の小中学生が描いた平和のポスター

<資料館地下に展示>

○四国(画家)さんの絵<資料館地下に展示 説明を聞く>

○原爆ドームの写生(四国五郎(画家)さんと一緒に)

Iさんの感想より

<さわやかな風が通り抜け静けさが辺りを包み込んだ。修学旅行に来ている小・中・高校生のはしゃぎ声がどこか遠くから聞こえる。私は川岸のコンクリートの階段に腰を下ろすと、川をはさんで対岸にあるその静かな建物を見た。風が強く吹きつける。私は画用紙を広げると、その建物「原爆ドーム」を絵に描き始めた。美しく緑豊かなこの「ヒロシマ」に原爆が落ちたとは思えない程、そこは静かで美しかった。しかし、絵を描き進めるうち、この辺りにも原爆によって倒れた人が数え切れないくらいいたこと、あの日ヒロシマは地獄と化したことなどが思い出され、私は身震いした。あの日の「ヒロシマ」の目撃者でもある原爆ドームが、無言でそれを語りかけてくるような気がした。厳かな雰囲気の中、私は絵を描き進めた。これは修学旅行の第1日目のフィールドワークの時の思い出だ。わたしたちの班の研究テーマは「原爆が美術に与えた影響」だったので、原爆をテーマにした絵や絵本を見たりした。

平和記念資料館で、被爆者、画家が「原爆」「ヒロシマ」をテーマにして描いた絵と、世界の小・中学生の平和のポスターを見た後、原爆ドームの絵を描いた。はじめは、何のために絵を描くのか、絵を描くことに何の意味があるのかよく分からなかった。けれど絵を描いてみて、その意味がよく分かった。原爆ドームは、無言であの日の出来事を語っていた。相変わらず風が強くて、私は画用紙をおさえながら絵を描き続けた。みんな無言で絵を描いている。絵が完成するにつれて、私はあの日のヒロシマについて少しだけ分かったような気がした。話を聞くだけでは分からないようなことを、本を読むだけでは分からないような、映像としての「ヒロシマ」。

絵が完成し、今日の日付とサインを書いた。私は今日この日を決して忘れないだろう。そして、フィールドワークで、他の人が出来ないようなことが出来て本当に良かった。いつかまた、この「ヒロシマ」にもう一度来ようと思った。>

○漫画の共同制作

白井富士夫さん（史朗さんの兄）の「あの夏の記録原始雲の証言」をみんなでマンガにしよう。

<体験したことのない見たわけでもない原爆を描くことの難しさを知る 登場人物の目を描かない事による表現があることを知る>

○今後の課題として

- ・テーマの「原爆」を「戦争」におきかえて「美術が伝える戦争」「戦争が美術に与えた影響」で調べたい。
- ・戦没学徒の絵を見たい
- ・画家たちが戦争中は戦争賛美の絵を描いていた事実をもっと調べたい。
- ・戦争と美術との関係を考えていきたい。

B組5班 「ヒロシマ～Steps Toward Peace」

○広島を悲劇を風化させないために

<原爆ドームが世界遺産に登録>

○反核・平和活動のあゆみ

<戦争責任が問われる>

○広島県原爆被害者団体協議会の坪井さんのメッセージ

<世界にヒロシマを伝えること／学ぶことの大切さ>

<国境・宗教・政治体制・民族を乗り越える人間になること>

○本川小学校 平和資料館

<むきだしになったコンクリートの壁>

○今後の課題

平和作りの第一歩は僕達から
平和を考える人を増やすこと

Y君の感想より

<今回の修学旅行では僕達はとても貴重な体験をしたと思います。僕たちは「戦争を知らない子供達」であるので、当然、原爆の絶大なる威力や当時の惨状などは、今回まで知るはずもなかったのです。

そして今回僕達は、被爆者の方々の貴重なお話や、今に残る貴重な歴史の証拠品を見たり聞いたり出来ました。僕が一番心に残っているのは、第一日目のフィールドワークの被団協の坪井さんのお話です。坪井さんは何度も死の宣告を受けながらも必死に原爆症と闘い、今まで多くの人に自分の体験を話されたそうです。アメリカや他の国が核実験をした時は、現地の人とともにデモ活動を行ったり、また国連でも発言したりするそうです。坪井さんのお話を聞いていると、核兵器の話題になると表情を変えられて、一生懸命に僕達に何かを訴えようとしているのがよく分かりました。坪井さんは、ようやく今は日本政府の国連に対する核兵器撤廃の姿勢が変わってきたとおっしゃっていました。しかし、まだアメリカの様な大国が核兵器を持っていることは確かです。今の若い人達の内、何人の人が本気で核のことを考え、核兵器をなくしたいと思っているかは分かりません。もし、次の世の中を担う人達が核の恐ろしさを忘れてたら、また再び、核兵器によって、この世の中が焦土と化すかもしれません。それをくい止めるべく、坪井さんを始めとする被爆者の方々が、振り返りたくない過去を、大勢の人たちに向けて、メッセージに代えて送っています。それをとても苦しく感じている人もいます。

あれから50年以上経った今、被爆者の方で、そういった活動のできる人はどんどん減ってきています。そういった人達の意志を継ぐという意味でも、もっと僕達自身が考察を深め、世界の人達に、忘れてはいけない過去として「ヒロシマ」を伝えていかなければならないと思いました。>

3. 折り鶴づくりと平和宣言文（研究旅行に向けて）

本校は広島への研究旅行の際、原爆の子の像の前で平和セレモニーを行なっている。このセレモニーの中では毎年献鶴を行なっており、本年度はどのような献鶴にするか、担当生徒（副班長会）の間で議論がかわされた。様々な案が出る中で、最終的には鶴を2m四方程度の簾状につなぎ合わせ、その中の鶴の色を整えることによって、「虹の図柄」と「PEACE」という文字を浮かび上がらせようということになった。

そして、デザインから作成方法の工夫、作成までほとんど生徒たちだけの手でやり遂げた。学年全体に呼び掛けて鶴を沢山折ってもらい、それを色別に数を調

整してつなぎ合わせる。実際にはここに書ききれないほどの試行錯誤をして完成させた。完成した時はどの生徒も一様に満足と充実感に満ちた表情を浮かべ、「つくってよかったね」という声が飛びかった。

研究旅行当日は、この大きな作品を運ぶのも一苦労だったが、互いに分担をして運び、平和セレモニーで献鶴したときには、再び充実感を分かち合うことができた。また、自分たちが心をこめてつくりあげた鶴を置いてくることに寂しさを感じる生徒もあり、そのときの素直な気持ちが、旅行から帰ってつくった短歌・俳句の中に現れている。



<平和公園での献鶴>

また、班長係が中心になって「平和宣言文」を作成した。みんなから平和宣言文の文章の言葉を募集した。集まった言葉を宣言文としてまとめるのには何回も話し合いをしたりして苦労したが、その話し合いの中から旅行後の「ホームページ」作りには日本語版だけでなく英語版があるとよいのでは、という意見が出た。しかし日本語版をそのまま英語にするのでは、学習していない単語もあるということと、平和セレモニーでは一人が暗唱できる長さにする必要があるのではということで、英語版の「平和宣言文」が出来上がった。英語の仲田先生には英語版作成だけではなく、平和セレモニーでの英語の発音指導にもご協力いただいた。日本語版と英語版の二種類の平和宣言は、班長係の生徒たちの何人ものリレーによる力強い声とともに広島の空に広がった。暗唱した生徒たちは、とりわけ心に残る平和セレモニーとなった。

4. 平和ポスターづくり (研究旅行後)

生徒たちは中学2年時に総合人間科の各自の研究テーマをもとに「環境ポスター」を制作した。今回は「国際理解と平和」をテーマにポスターを制作した。まず去年使った画像処理ソフトの「キューブ・ペイント」や「花子」の使い方を復習した後、画像を描き、

日本語と英語など2ヶ国語でメッセージを入れた。

この「平和ポスター」作りは、総合人間科と英語科のクロスカリキュラムの学習活動として位置付けている。生徒たちは4～7月に各自や班のテーマを設定し、9～12月に研究テーマを深め、1～3月に研究をまとめ発表する。そのまとめの段階で生徒はそれぞれが自分の考えを持つようになり、自分のメッセージをアピールする手段のひとつとしてポスターを描くというものである。

ポスター作品が出来上がった後、生徒たちは各ディスプレイに各自のベスト作品を表示して、評価用紙を手に教室中を歩き回って互いに気に入る作品を選び相互評価をした。優秀作品をいくつか選び研究集録の表紙として利用した。(資料2参照) その後2001年9月の学校祭の総合人間科展示でこのポスター作品を出品展示した。

5. 広島・大久野島研究旅行の短歌と俳句 (研究旅行後)

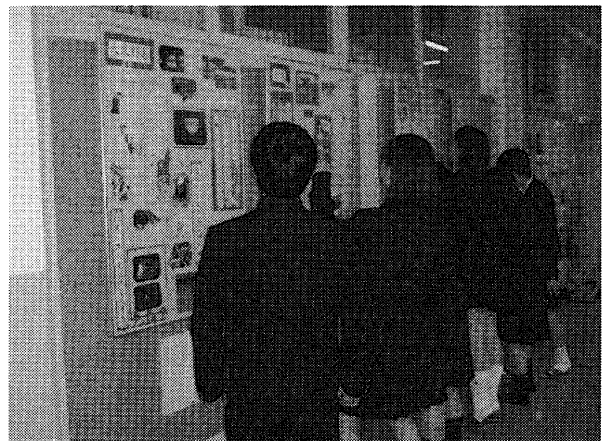
旅行後の国語の時間に旅行の思い出として短歌と俳句を詠んだ。一時間でやっと一句という人もいれば、たちどころに十句二十句という人もいて、皆で指を折りながら楽しんで作った。

その後、各クラスごとに、全員の短歌と俳句を読み合った。「どれもこれもすてき」「どうしてこんな風に詠めるの」との感想がでた。

次にその中から各自5句を、選んだ理由も書いて、みんな投票した。資料1の中の※の作品は、そのようにして選ばれた短歌と俳句の中でも、票数が多かったものである(#のものは中3の先生達が選んだ作品)

その後みんなが選んだ俳句・短歌作品に合わせて、「写真展」の実行委員がみんなに呼びかけて旅行の写真を持ち寄り、4枚のパネルを作成した。図書館の廊下に展示したが、なかなか好評であった。

みんなで作った短歌や俳句と写真組み合わせて旅行



<短歌・俳句作品と写真を組み合わせたパネル展>

の「写真展」をしようという旅行委員長のアイデアは大成功であった。

特に、広島市内をフィールドワークで歩いた時に、一人一人が心でとらえたもの、「原爆」に思いをはせた短歌や俳句が数多くあった。これらの作品はそれらを詠み合い鑑賞するときにも他の人たちの心を深く動かした。

ヒロシマについての、四月以来の総合人間科を中心としたさまざまな学習が、これらの短歌や俳句に表現されたもののベースになっていることがよく分かる。

(資料4参照)

6. Webページの製作(12月～3月)

1年間の研究成果の発表方法として、口頭発表と研究収録の作成に加え、当学年ではコンピューターを用いた発表も取り入れることにした。当初の計画ではMicrosoft Power Pointを使用したスライドショー的な発表形態にする予定であった。しかし、英語科で簡単なWebページを製作する授業がされていたこともあり、本格的なWebページを製作してインターネットで広く公開することに方針が変更された。

このため、フィールドワークで聞き取りを行なう際にインターネットでの公開に関して許可をもらう必要が出た。これは、収録であれば配付先は限定されているが、Webページは不特定多数に対して公開するためである。具体的には肖像写真、音声、聞き取りの内容、実名など個々の項目毎に公開の可否を聞く形式とした(資料3参照)。

著作権の尊重とプライバシーの保護は特に注意しなければならない点であった。著作権に関しては、フィールドワーク時に許可をもらわなかったことには(例えば、頂いてきた絵葉書の写真を資料として使用するなど)改めて許可を得ること、正当な引用の慣行に従うことの2点に特に指導が必要であった。プライバシーに関しては生徒の個人名と顔が識別できるような写真は掲載しないこととした。これらは、教官会議での申し合わせ事項であるネットワークガイドラインに従ったものである。

実際の製作は以下のような流れで行なった。

- ・文章の入力(収録と共用するためMicrosoft Wordを使用してテキスト形式で保存)
- ・写真やイラストをスキャナーで読み込む
- ・Webページとしての編集(Netscape Composerを使用)

Microsoft WordでもHTML形式の保存はできるので、それを使用したほうが初心者には作業がわかりやすいと思われる。しかし、その結果作成されるHTMLファイルはMicrosoft Internet Explorer以外のブラウザでは

正常に表示できない部分が多いので広く公開するには不向きである。Webページ製作専門のソフトウェアは多種あるが、無料で使用できるものとしてNetscape Composerを選択した。

VII. 総合人間科の発展的展開

～教材Webページコンテストへの参加～

『附属中の2チーム金賞!!』

教材WebページコンテストThinkQuest@JAPAN2000』

その後、総合人間科の発展的活動があった。それは、このとき作成したWebページをもとに、教材WebページコンテストであるThinkQuest@JAPAN2000にこの学年の2チームが参加したのである。そして、中学生高校生の部の社会科学部門とスポーツ・保健部門においてそれぞれ金賞を受賞したのである。チームの生徒全員とコーチ1名が6月23日に東京で行なわれた授賞式に招待された。

ThinkQuest@JAPANは1996年に米国でスタートした中学生・高校生のための教材WebページコンテストThinkQuestの日本語版で、シンククエスト日本プログラム推進委員会(URL:<http://www.thinkquest.gr.jp>)が主催しており、今回が第3回目であった。

今回のThinkQuest@JAPAN2000には361チーム(915人)が応募し、このうち作品を提出した167チームが審査の対象となった。制作された作品は、その作品の教育的価値、Webページとしての質、インタラクティブ性、今後の利用見込み、メンバー間の協調性という5つの観点から審査が行なわれた。

山口剛君、足立真訓君チームのテーマは「広島・長崎一平和探求の旅」で、社会科学部門で金賞に選ばれ、去年の銀賞に続いて2度目の受賞となった。足立君と山口君は、「今年は表彰式が豪華でした。一泊で参加したので他校の生徒や先生と交流ができてよかったです。中学校3年生の総合人間科で取り組んだ広島研究の成果を僕たちのWebページの参考にしました。みなさん、ありがとうございます。」と話していた。フィールドワークの方法についてのアドバイスでは、附属中学校総合人間科のフィールドワークのノウハウをまとめて紹介した。

URL:<http://www.thinkquest.gr.jp/library/2000jwin/>

team30052.html

平井里奈さん、山内友恵さんチームのテーマは「どうしてキレイにするの?」で、スポーツ・保健部門で金賞に選ばれました。これは、私たちの身体や家の中の汚れや微生物と病気の関係、および清潔に保つための対策について学ぶWebページである。総合人間科で身に付けた資料収集の方法を応用し、自分たちで



<受賞した2チーム>

フィールドワークを行なって、その後はこつこつと緻密な作業を続けた。美しい手描き画像が特徴である。

URL:<http://www.thinkquest.gr.jp/library/2000jwin/>

[team30302.html](http://www.thinkquest.gr.jp/library/2000jwin/team30302.html)

両チームの受賞は、名大附属中学・高校の特色ある教育実践と、名大のNICEが引かれているという恵まれた情報環境を背景に実現したものである。附属中・高では平成7年度から総合的学習である「総合人間科」の授業に取り組んでいる。中学校1年生は「生き方」、中学校2年生は「生命と環境」、中学校3年生は「国際理解と平和」というテーマで生徒が自ら研究テーマを設定し、調査研究をしてきた。今回の受賞はこうした「総合人間科」の授業の中で彼らが主体的に取り組んできた研究テーマをあたため、ふくらませてWebページにデザインしたものであった。また、生徒たちは日頃から名大のNICEを利用して各自の研究のための情報検索をしたり、海外の学校と共同研究をしたり、研究成果をWebで発信したりする活動を行なっている。今後も附属中学校・高等学校の恵まれた情報環境を活かした教育実践を推進する予定である。

VIII. まとめ

グループ学習での取り組みが主ということで、特に研究旅行に行くまでは、各生徒のテーマに対する興味・関心の度合いによって、積極性に個人差が見られた。

しかし、広島での研究旅行においては、戦争の傷跡に直接触れることにより、旅行までの準備の積み重ねに対する充実感や、戦争の悲惨さに対する驚きや憤り等を感じた生徒が大半で、事後の感想文などにもその様子がうかがえる。

「(…略…) 事前学習に事前学習を重ねて、面倒だと感じたことも数多くあったと思う。でも、今、こうして振り返ってみると、これまであんなにがんばって来

たからこそ、この充実感と満足感を味わうことができたのだと、私は思う。(…略…) これはきっと学校生活や人生でも同じなのだろうかと、私は15歳なりにいろいろ考える。苦しいこと、つらいこと、悲しいことがたくさんあっても、仲間同士お互い頑張れば物事を成功させることによって充実感や満足感を味わうことができ、なおかつ、励まし合った仲間とのさずなも一層深まるのだ。これからも、苦しかったり、つらかったりしても、それから逃げたりせず、充実した生活を送ること。これが一番大切なんだと、今回の旅行を通して強く感じた。本当に楽しい旅行だった。」(Oさん)

「(…略…) たくさんの人と出会い、たくさんの話を聞いて、学んだことを忘れず、これからの私の生活に役立てていきたいと思う。また、ただ学校の勉強というだけでなく、自分の気持ち、考え方や、意見を育てることができて、とても良かったです。(…略…)」(Aさん)

「(…略…) あれから50年以上たった今、被爆者の方々で、そういった活動のできる人はどんどん減ってきています。そうした人達の意思を継ぐという意味でも、もっとぼく達自身が考察を深め、後の人達に忘れてはいけない過去として伝えていかなければならないと思いました。」(Y君)

上記の感想文からも読み取れるように、4月から進めてきた「国際理解と平和」の総合人間科の授業は、広島への研究旅行を中心とした様々な体験を経ることにより、より深く生徒たちの心にしみ込んだように思う。中でも、研究旅行と総合人間科の授業を通して、これからの自分の生き方や行動に結びつく深い感想を述べた生徒が少なからずいたことは、それが直接将来の進路に結びつかなくとも、その進路選択を行なう際の基盤となるであろうと考えられる。そうした意味で、このような感想を述べた生徒たちにとっては広い意味でのキャリア形成の基礎づくりとなっているのではないだろうか。

一方、感想文や言動からはそうした効果が見受けられない生徒たちに対してどのように働きかけて行くべきか、これが今後の課題と考えられる。しかし、表面的には効果が見受けられなくとも、生徒の心の中には貴重な「種(学習、体験)」がまかれ、今後何年か先の何かの機会にその「種」が芽を出し育って行くことは十分に期待できる。従って、より良質の種を、より良いタイミングでまき、それが育つようなより良い環境を提供して行く取り組みが今後も必要となるであろう。

また、一部の生徒ではあるが、総合人間科での学習が「ThinkQuestへの参加」のような活動へとつながっ

て行ったことは、総合人間科の発展の一つの可能性を示している。そうした発展の様々な可能性を、生徒たちとともに探っていくこと、それが今後の一つの方向にもなり得ると考えられる。

中3平和宣言 (英語版)

(資料1)

平和宣言文

「平和」って何だろう。私達は、いつ「平和」について考えるのだろう。私達は人を「幸せ」にする事、みんなが「幸せ」になる事、それが「平和」だと考えています。

今、私達が目にする「広島」の町は、清らかな川が流れ緑豊かな美しい町です。五十年前のあの日、世界で初めての原爆が広島に落とされました。数千度の熱線とすさまじい爆風が地上に襲いかかって、すべてのものは赤々と燃え尽きました。黒い煙になった死体。全裸で逃げまどう人々の群れ。水を求めて川辺にどどりついで息絶えた人々。冷たくなった赤ん坊を抱きしめる母親。焼けただれた皮膚をぼろぼろのようにひきつづいて歩く少年。電気に打たれたように髪が逆立っている少女。まさに地獄絵図でした。そして今日まで多くの人が被爆の後遺症のために苦しみ、死んでゆかれました。

私達、名古屋大学教育学部附属中学校3年生は、「ヒロシマ」で、歴史の真実を学び、真の平和を次の世代に伝えるために、この広島に立ちました。

私達は三年生になってから、戦争をテーマにしたビデオを見たり、祖父や祖母に戦争体験を聞いたり、日本と世界の戦争の歴史について学んだり、原爆の実体を知るために広島に残る多くの資料を読みました。しかし、当時の惨状をただ知ることができたのでしょうか。平和な社会に生まれ育った私達には、戦争のみじめさも悲しさも身近にはありません。だから、いろいろな方法で、戦争と平和の問題を調べ学んできたのです。

今、世界は21世紀に向けて、めまぐるしく変わっています。世界では今なお紛争が続き、内戦や繰り返される殺戮(さつりく)によって、多くの命が奪われています。また、地球規模で環境破壊が進み、アジア・アフリカの多くの子供達は飢えに苦しんでいます。

日本は平和だと言われているのですが、本当に平和な世界に私達は住んでいるのでしょうか。今でも心の中に戦争の傷を残している人がいるし、新たな紛争で傷ついた人が世界中にいます。沖縄には、広大な米軍基地があり、人々は基地とともに生活をしています。インドやパキスタンでは核実験が行われました。核兵器が人類滅亡を引き起こすという真実から目をそむけてはいけません。強い意志は真実から生まれます。戦争や核兵器の恐ろしさを忘れず、平和の大切さを世界の人々へ伝えること、それが私達の責任です。

私達は広島の人々の心を学び、語り継ぐとともに、平和な時代に生きること喜びを感じ生活するだけでなく、私達自身がこの平和を維持し、誰もが豊かに生きる社会を創るために、世界の人々と手を取り合い行動することを、ここに宣言します。

この英語版平和宣言は、みんなが作った日本語版をもとに作成したものです。

(意味)

日本の皆さん、世界の皆さん、私達は今日、この広島平和公園に集い、原爆の落とされたところを実際に見ます。私達はここにきて、証言の方々に会い、彼らの苦しみや悲しみを分かち合います。

私達は、平和が、皆が幸せに生活するために何よりも大切であると分かっています。私たちの訪問の目的は、「平和とは何か」、「どのようにしたら平和を進めていけるか」という問題の答えを見つけることです。

この平和学習を通して、私たちは平和の大切さを実感し、ありがたく思う気持ちを学びます。私たちが学んだことを次の世代に伝えていくことを私たちは約束します。

私たちは、平和な未来を作るため、核兵器の廃絶を世界に訴えかけます。そして世界の人々と地球上に平和を進めていく努力をすることを誓います。

People of Japan and people of the world, we are here today at Hiroshima Peace Park to see the actual site where the atomic bomb was dropped. We are here to meet the survivors, and share their sufferings and sorrows.

We understand that "peace" is more precious than anything else for everyone to live happily. The purpose of our visit is to find out the answers to the questions: "What is peace?" and "How can we promote peace?"

Through the peace study we realize the importance of peace and learn to appreciate it. We promise to pass on what we have learned to the next generation.

We urge the world to eliminate all the nuclear weapons in order to create a peaceful future. We pledge to make efforts to promote peace on earth with the people of the world.

平和公園にて

平成12年(2000年)11月9日

名古屋大学教育学部附属中学校3年生一同

November 9th, 2000

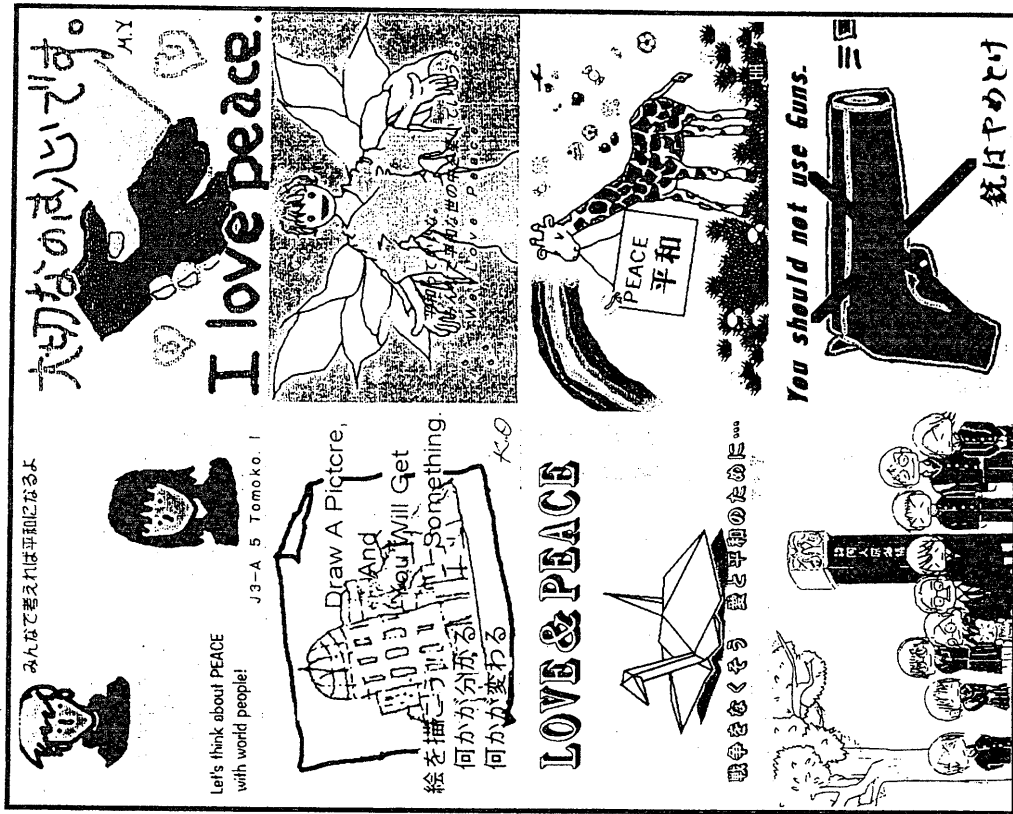
The third year students of Junior High School affiliated to the School of Education, Nagoya University.

(資料2) 平和ポスターを用いて作った研究集録の表紙

2000年度 中学3年総合人間科研究集録

国際理解と平和

体験を通して考えよう
—視野を広げ理解を深める—



平和ポスター作品

名古屋大学教育学部附属中学校

(資料3)

平成12年11月8日

_____様

名古屋大学教育学部附属中学校
3年生徒・担任団

広島研究旅行でのインタビューに関するお願い

この度はお忙しい中、本校のフィールドワークにご協力くださいまして誠にありがとうございます。私達は、総合人間科の学習の一環として今回のフィールドワークを実施いたします。この成果は、今後、総合人間科の学習の中でまとめを行い、研究集録(冊子)の発行や本校のWebページでの公開をしていきたいと考えています。

そのため、以下の事項についてご了承を頂ければ幸いです(部分的なご了承でも結構です)。なお、Webページでの公開に関しては、不特定多数の人々の目に触れることとなります。個人名や肖像写真の公開はしたくないとお考えの方は、その旨お伝えください。

また、Webページは本校での公開に加えて、生徒有志が教員の指導のもとにThinkQuest@Japan2000という教材用Webページコンテストに参加し、今回の研究成果も取り入れて公開したいと考えています。この点もご考慮の上、ご返事を頂きたいと存じます。

1. 建物や風景の写真撮影
2. 1. の写真を研究集録やWebページに使用して公開すること。
3. 個人の肖像写真の撮影
4. 3. の写真を研究集録やWebページに使用して公開すること。
5. お話し頂いた音声の録音
6. お話し頂いた内容を研究集録やWebページに文章として引用して公開すること
7. 録音した音声をWebページで公開すること。
8. 個人名を研究集録やWebページに記載して公開すること。

連絡先

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学教育学部附属中学校
電話 052-789-2680 (教官室)
ファックス 052-789-2696 (事務室)

ホームページのアドレス

本校 <http://highschl.educa.nagoya-u.ac.jp>
ThinkQuest@Japan2000 <http://www.thinkquest.gr.jp>

(資料4)

広島・大久野島研究旅行の短歌と俳句

A組

<広島>

戦争の話を聞いてみな涙
胸に来る原爆の絵平和の絵
原爆や多くの命散りにけり
きのご雲入道雲や鯛(いわし)雲
秋晴れに歴史の重さ胸痛む
※ 僕は見た真っ赤に燃えるヒロシマを
(爆心地を見下ろすことが出来る比治山の頂上に落ちていたどんぐりの気持ち)
死の灰を巻き上げのぼるきのご雲
語る目にあふれんばかりの涙あり
広島歩いた道には枯葉落ち(放影研)
来年も冬に出会える幸せかな
語り部の目の中映る過去の夢
※ 数えても数え切れない鶴の数
※ 広島平和の灯火いつ消える
鶴を折り平和を祈る広島火の海や今も聞こえる叫び声
いつだろう平和の灯消える日は
広島である日あの時かい間見た
秋空に平和を願う私たち(平和公園)
全員が空を見上げる爆心地
ほっとする川のこちらの平和さよ
(元安川の向こうに原爆ドームが見えている)
いつだろう核の炎が消える日は
青い空原爆ドーム寒寒と
鳥渡る原爆ドーム空静か
いつまでも続け平和原爆ドーム
広島過去を伝える原爆ドーム
熱い陽の影を残せし壁の間よ
二度と再び繰り返さぬと
※ 死んでいる母の隣に立つ子供
無垢(むく)な瞳に何映るのか
※ 失って初めて分かる僕達の
持っているものその大切さ
広島平和の象徴鳩なのにどうしてそんなに
ずうずうしいのか(平和公園で弁当をとられて)
戦争の話を聞いてわが心平和にしようと思強く思う
広島で平和を願うセレモニー平和の鐘が鳴り響く
広島へ鶴飛び立てば虹連れて
世界を見つめ平和もたらす
ベンチだと思ひ込んでた側の石
実はドームの石柱だった
この空に想像できぬきのご雲
全てを見てた原爆ドーム

青空にくっきり映る建物は平和の象徴原爆ドーム
川べりに巖(おごそ)かに建つ原爆ドーム
あの日の出来事無言で語る

<宮島>

秋深し恋に燃えるや紅葉狩り
美しき川の流りに紅葉のる
※ 地をふめば音を奏(かな)でる落ち葉かな
ふと見れば海に輝く陽の光
※ 冷やかな潮の香りの巖島
船の中鳥居見つけて大はしゃぎ
宮島や紅葉色づくだんだんと
宮島や鹿に食われた紙袋
宮島の鹿と戯(たわむ)れ楽しいな
宮島は真っ赤に燃える木々の島
ズボン折り海へジャブジャブ少年ら
宮島の鹿ももうすぐ冬支度
宮島の海に浮かぶ鳥居見てない道さがす竜宮城
雄鹿に土産袋を食べられてあとに残った紙の残骸
ひさかたの光を浴びて美しき
夜にはえるや秋の木の葉か
宮島でたくさんの星夢に見た
正夢ならず空には月一人
宮島の海辺に建ちたる巖島
流れる風は清らなりけり
青い海赤い鳥居が美しき訪づれた人心和ます

<大久野島>

夕方の静かな海に太陽が金色の道描いて消した
夕方の大久野島は紅葉色空一面の鯛雲たち
食事時巨人の足音耳にして震るえながらも
必死で逃げた(大久野島の兎)
毒ガスが大久野島にあったとは兎遊べる工場跡に
美しき夕日を全身浴びている
ここは平和な大久野島
鯛雲すきまから見ゆるおぼろ月
大久野島の美しき空
イベリット大久野島で作られた今は冬眠沈む海底
船に乗り島に別れをつげた時
海に飛沫(しぶき)目に涙
僕は見た大久野島のウエハさん
海へ3度のビッグジャンプ
夜の海やわらかな月うつして
大久野島地図にのらない悲しさよ
うっかりと座ってしまえば兎の糞(ふん)
瀬戸内の海をいろどる夕日かな
大久野島消えることなし昔の影
キラキラと映る太陽瀬戸内海

うさぎさん走り抜けてく大久野島
うさぎたち夕焼けあびて冬支度
うさぎ達むらがる島は今もあり
森の中眠りについた兎かな
大久野の海に輝く名月よ
大久野の海風寒し冬近し
大自然昔の怖さ感じさせず (大久野島)
秋風にふかれて元気白兎
肝試しいつのまにやら星月夜
飛び込んで別れを惜しむ植波さん
※肝試し二人見上げた星月夜
<海蛍>
海蛍グラスに入りカクテルのよう
群青 (ぐんじょう) の神秘の中に海蛍
海蛍グラスを青く染めさせる
海ホテル光り輝く空の色
海ほたる暗きに光る青々と
われは見た海黒々と海ホテル
我れは見た月より輝く海ホテル
海蛍グラスの中で青光る
海ほたる青くひかって道しるべ
鮮やかな青い光の海ホテル
ウミホテルほのかな光り美しく
守っていききたい自然の海よ
※聞こえるかい瀬戸の海から僕らの声
「こっちの水は甘いぞ」(蛍)
海ホテル海を探せど黒々とコップの中に光輝く
<研究旅行>
宮島と大久野島と広島で
みんなと過ごした修学旅行
離れてもきっといつかは思い出す
秋の広島修学旅行
きずつけてきずつけられて僕達は
孤独も知って素晴らしくなる

B組

<広島>

※天と地のはざままで光るその瞬間 (トキ) に
変わらぬものは蒼い空のみ
みなさんへ「生キタイ生キタイ」鶴 (ツル) が言う
(佐々木禎子さんの折った鶴を見て)
平和への願いを込めた千羽鶴
置 いてくる時寂しさまさる
千羽鶴みんなの思い背にのせて
平和に向けて今飛んでいく
青い空八時十五分に原爆が
ひかりそのまま時間止まれり
叫び声届いていても止まれない

水をください助けてください
巻き戻し絶対ダメだ戦争は
次の世代は停止を押し
全員で一生懸命行った平和セレモニー鶴が輝く
語り部の話を聞いて戦争の悲惨さを知る平和を学ぶ
戦争の悲惨さを知り平和とは大切なことと考え直す
広島へ訪 (おとづ) れるまで当り前
「今は平和ね」「今は平和ね」
戦時中被爆者たちは空見上げ
鯨雲をも食べたがったか
原爆の傷跡残る遺物たち我らに話伝えてるよう
原爆の事実について知る旅で
予想以上の悲劇を知った
原爆後半世紀経ち広島で
被爆者達はまだ癒 (いや) されず
ヒロシマはあの日のことを忘れない
人の悲鳴もその空しさも
夏の日原子爆弾その光
誰の思いも燃え尽きていく
広島語り部ゆえの傷がある
時が経ても心の中に
真っ先に荒野に芽ばえたキョウチクトウ
広島市民に勇気与えた
山眠る来年もまた芽を出そう
平和な春と原爆ドーム
いわし雲そばを流れる元安川
原爆ドームに平和を願う
爆弾だこわくて逃げる市民たち
逃げられもせず原爆ドーム
ヒコーキ雲恐怖のシルシだった日も
※「助けて」と叫んできそうな写真たち
(広島平和記念資料館にて)
広島や忘れえぬ夏あの瞬間
戦争の傷あと見せた秋の街
今は亡き被爆者に誓う核廃絶を
毎日と変わらぬ朝にピカドンが
戦争を今に伝える広島市
暗き夜に地に燃え上がる炎かな
千羽鶴思いよ届けドームかな
広島空のてっぺん平和かな
戦争の後に残るは涙悲しみ
訴える原爆ドーム無口かな
広島で平和の幸せ感じ取る
広島秋を彩る紅葉たち
広島過ちはずっと忘れない
人が泣く原爆のかけ今も尚 (なお)
ちよつと寒い安芸の広島冬近し
広島のみじまんじゅう秋深し

広島の現在（いま）と過去の重なりぬ
（廃墟の写真と今の風景との違い）
目を伏せる見れない先に原爆が
（人間がニンゲンでなくなってしまったパネルを見て）

橋渡る昔を思い渡り切る
（五十五年前には人で埋め尽くされていたかと思
ながら平和大橋を渡る）
そら見上げあの日の空を思い出す
誓いますあの日を二度と戻（もど）さない
千羽鶴平和に向けて飛んでいけ
千羽鶴願いたくした禎子さん

※核兵器残されたのは地獄だけ
広島に残る記憶もうすれつつ
秋の空平和の鳩が飛んでゆく
原爆は人の心も破壊する
※広島で残ったものは涙だけ
戦争の遺物を目にし秋の風
千羽鶴ここで祈るは皆同じ
フィールドワーク当時の酷（ひど）さよく分かる
広島の秋晴れに飛ぶ鳩の群れ

銀杏（いちじょう）舞う中州で聞いた夏の話
平和への希望伝える秋の風
原爆の悲しみ越えて今の広島
僕達は白米食べてしあわせだ
原爆の傷跡みせた安芸の街
広島で命の尊さ知りました
語り部の話聞いて胸痛む
過ちや今でも残るヒロシマに
広島に空しく残るドームかな
戦争の爪痕（つめあと）残す原爆ドーム

<宮島>

風に舞う紅葉輝き美しきかな
赤鳥居海のかなたに聳（そび）え立つ
宮島の鹿とたわむれ地図食われ
鹿の子が宮島歩く僕の後
宮島は赤い鳥居で観光地
潮引いて歩いていきたい赤鳥居
紅葉に囲まれ歩く島の中
宮島の鹿も平和を願ってる
宮島は冬空あおぐモアイ像
宮島は大昔から神の島
名物がしゃもじだとはおどろいた
宮島の真っ赤な紅葉は日本一
宮島や目下広がる安芸の海
紅葉狩りあとちょっとで見頃だね
宮島に山眠りても朝は来る
紅葉散る秋の宮島見たかった
宮島で鹿と一緒に写真撮り

北風の中で佇む大鳥居
宮島や紅葉の下で鹿走る
宮島や薄く色づく紅葉はあと少しで言う事なし
<大久野島>

※釣れなくてそんな気持ちもつれなくて
秋の空びよこびよことうさぎさん
海はいりいつまで泳ぐウエハさん

戦争時地図から消えた大久野島
坂を降り広がる景色は安芸の海
釣りしつ大久野島でたそがれる
肝試し怖さ忘れた夜景色
咳で生き二度と返すな毒ガスよ
夜の海早く来たれど冬支度
港来て先に行くよと鳥渡る
星月夜大久野島はうさぎ島

地図に載る大久野島はもう夜長
魚釣りつれたつれたよ秋の海
大久野島朝日まぶしい平和の朝
毒ガスも今は平和なうさぎ島
河豚（ふぐ）釣りにみんなうらやむ大久野島
岩壁にずらりと並ぶ釣り人か
日も暮れて春また何処と雲は尽き
後に残るは夜の静けさよ

毒ガスが撤去出来てもカラダには
痕（あと）が残って痛（いた）む心よ
おだやかでうさぎが走る大久野島
その裏側は悲しみの跡

毒ガスも化学兵器と知らされて
多くの人働きにゆく
帰り際思いもよらぬプレゼント
栈橋光るあの水しぶき

<海蛍>

夜の海あおお光る海ホテル
※海ホテル放つ光は神秘的
海ホテル青の光に口ひらく
月満ちてされども光る海蛍
海蛍蒼く輝く小さき島
ウミホテル光輝きみな騒ぐ
されど蛍は命削（けず）れる
海ホテル青い光が悲しげで大久野島の歴史を語る

<修学旅行>

※焼きたてのもみじまんじゅうほおばれば
君も私も笑顔になるね
※三日間プーさんバック背にしょって
楽しき思い出修学旅行
青春をみんな語る十五の夜
夜はみな別人のようよくしゃべる
旅終えて帰路の窓には星月夜